

## 認知における二元性：言語を中心とした学際的視点

我々の認知活動の中心になるもので、二項対立というものがあります。これは、人間の認知機能の進化や文化の変容を語る上でも、大変重要な要素になってくるといえます。認知言語学においても、ゲシュタルト心理学から応用したとはいえ、「図」と「地」の分化現象のように、二項対立は良くあることです。過去の研究を見ても、Lévi-Strauss (1963, 1966, 1978) などの構造主義などに代表される、20 世紀の学術研究では二項対立が重要な研究要素でした。近年では、数学や文化人類学 (Jablan 1995, Hornborg 2005)、考古学 (Borić 2007)、神話学やジェンダー研究 (Shchepetunina 2011)、言語の進化 (Heine and Kuteva 2007; Toyota 2009) などでも見られます。このワークショップでは、このような二項対立を二元性と呼び、この二元性の重要性を、言語だけに限らず人間の認知能力全般において、以下に記すよっつのテーマから学際的に論じてゆきたいと思います。

言語文化人類学に関する発表では、言語の「右」と「左」という概念を考え、世界の言語においてこの二語の語源 (バントゥー語族などでは、男>右、女>左；インド・ヨーロッパ語では、正しい>右、間違い、否定>左、など) の違いや、この二元性におけるそのほかの言語へ与える影響 (空間から時間への比喩表現は、右、左などの概念がないマヤ語やアマゾンで話されているアマンダワ語などでは乏しい) を歴史的に考察します。「右」と「左」においては、中間という概念が構成されづらく、一度左右の二元性が作られると、かなり安定しているように見られます。また、他の二元性では、対立する二項の要素が異なる時期に構成されるものもありますが、左右に関しては、同時期に作られる傾向にあるといえます。この様な点を踏まえながら、左右というものの二元性における特異性を考察していきます。

視覚記号に関する発表では、中国の古代文字 (甲骨文・金文)、現代漢字、現代記号 (アイコン) の対照分析を行い、構成的および意味的な二元性に着目します。現代漢字では、左右、上下、斜めの対称の字が数多くありますが、殆どの場合には対称関係が形式的で、それが各文字の具体的な意味に反映されていません。それに対して、象形性が高い甲骨文字のような古代文字では、構成要素の関係および空間配列が意味を伝達する機能を持っていて、同じ部分の組み替えによって、異なる意味が表現されています。例えば、手+手+物という組み合わせは、左右対称の配列の場合は「両手で器を持つ」の意味を表す「共」という字になり、一方、斜めの配列では「物を渡す」という「受」の字になります。現代漢字および現代記号 (アイコン) におけるその特徴の有無及び表現方法について検討します。

民俗学や神話に関する発表では、性別の二元性とジェンダーの二元性について考えます。日本神話を出発点として、神話における女神と男神のイメージを分析軸にして宇宙秩序と社会秩序において男女の位置とそれぞれに連想されている概念を考察します。記紀 (古事記および日本書紀) 神話の考察を行い、それが提起するテーマは物事の起源と秩序の確立とに大別し、前者の枠組みでは女神が主役を演じることが多く、男神より上位の役割を演

じている場合があります。後者の場合、アマテラス大御神の用例を除けば、基本的に男神に主役を与える傾向がみられます。日本記紀神話における傾向を元に、シベリアに住む民族（基本的にアルタイ民族）の神話と照り合わせて、成立ちとその要因を考察しようと思います。神話を昔の人の科学と獲れえるらえるなら、日本と東アジアの地域を比較することで、地域性と各民族の認知的特異性が見られると考えられます。

最後の発表は言語の進化についてで、人間の言語の進化において、名詞と動詞という二項対立がしめる重要性について考えます。言語の進化をいろいろな試みをもって解析しても、名詞と動詞の二項対立にはたどり着くことが多いのですが、まったくの初期段階からこの段階にたどり着くまで、どのような経路をたどってきたかが定かではありません。ここでは、名詞・動詞の対立を形成するのに、文法化現象などを用いて時間を逆算すると、進化の90%ほどの時間を要していると考えられます。実際、名詞と動詞があれば、今の複雑な言語の構成要素がどのような変化を経てきたか説明できます。つまり、文法の基礎をなす二元性があれば、言語の進化はスムーズに行くのですが、そのはじめの二元性を作るのが困難であったようで、我々の先祖はそれを作り出すのに相当の月日をかけてきたといえます。

このワークショップで触れられる内容は、二元性というテーマにおいてはごく一部のことで、学際的な側面を踏まえながら、基礎の構図を明らかにして行こうと思います。

## 参考文献

- Borić, D. 2007. 'Images of animality: Hybrid bodies and mimesis in early prehistoric art.' In Renfrew, C. and Morley, I. eds. *Image and Imagination: A Global Prehistory of Figurative Representation*. Cambridge: The McDonald Institute for Archaeological Research, 89-105.
- Heine, b. and T. Kuteva 2007. *Language Genesis*. Oxford : Oxford University Press.
- Hornborg, A. 2005. "Ethnogenesis, regional integration, and ecology in prehistoric Amazonia", *Current Anthropology* 46, 589-620.
- Jablan, S. V. 1995. *Theory of Symmetry and Ornament*, Belgrade:Mathematics Institute.
- Lévi-Strauss, C. 1963. *Structural Anthropology*, New York: Basic Books.
- Lévi-Strauss, C. 1966. *The Savage Mind*, London: Weidenfeld and Nicolson.
- Lévi-Strauss, C. 1978. *Myth and Meaning*, New York: Schocken Books.
- Shchepetunina, M. 2011.「記紀神話における男神と女神の性別役割 - 物事の起源と秩序の形成をめぐって」博士論文、大阪大学
- Toyota, J. 2009. *Kaleidoscopic grammar: investigation into mystery of binary features*. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing.